

# 明代の道教始原説話について

—三種の「老君道教源流」—

一一階堂 善弘

一、はじめに

中国の通俗文学においては、その物語を古い時代に取材したものが多く見られるのであるが、往々にしてそれらの小説や戯曲は、その内容や設定にむしろそれ自身が書かれた時代を反映していることが普通である。『水滸伝』は舞台を宋の時代に設定しているが、そこに描かれる社会は明代の様相を強く感じさせるものである。『三国演義』も、三国時代の興亡を主題としているが、内容から想定される時代はやはり元明代の社会である。『西遊記』に至ると、時間的な枠を越えてしまい、遠く天竺においても漢字が使用され、「中華」と同じ風俗で言葉も同じということになってしまっている。当時の通俗的なレベルでは、この現実に存在している社会は、古来よりそう変わらぬものであるとの認識があつたのであろう。

これと同じ様なことは、また宗教に対する認識においても見られる。例えば、『西遊記』では、天竺や西域の地において「道士」が存在するし、<sup>(2)</sup>『封神演義』など西周・春秋時代に取材した小説・戯曲においても道士や道観が登場する。また、『三国演義』の諸葛孔明が道衣をまとい、遁甲の術を使うことなどもある。道教や仏教は古

代においても普遍的なものであつたとの認識があつたのである。しかし、これら無秩序とも見える通俗文学等の時代感覚においても、「道教」の始原、すなわち道教が何時始まつたかについては、かなり統一された見解を有している。それは、太上老君の出世をもつて道教の始まりとすることである。

無論太上老君つまり老子を道教の祖と見なすことは『魏書』釈老志の「道之原、出于老子」以来の定説とも言うべきものである。通俗文学や民間信仰においては、この説をただ無批判に受け入れたものと考えられよう。しかし、このように太上老君以降道教が始まつたとするならば、老君の出世は殷代であるとされていたことから、春秋時代に道教が存在することには不都合は無いことになる。厳密なものとは言い難いが、通俗文学の側ではおそらくこのような認識を漠然と有していたために、先に見たようなことに矛盾が存在するとは考えなかつたのではないだろうか。そのことは、通俗文学や民間信仰の資料において、道教の始原に言及する時には必ず、老君の出世について述べることから首肯されるのである。小論では主として、明代の通俗文学に見える幾つかの「老君道教源流」の資料を中心として、明代に道教の始原が民間層でどのように認識されていたかを考察してみたい。

## 二、『三教源流搜神大全』に見える「道教源流」

『三教源流搜神大全』<sup>(5)</sup>は元明代に民間信仰で有力であつた神々について、およそ百三十二の項目を立ててその事跡や封号などを述べたもので、近世民間信仰を調査する上での重要な資料である。「三教」と称するものの、儒教については冒頭の儒氏源流という項目がわずかに与えられているのみで、記載されている神の大半は道教・仏教に関連したものである。しかも『道蔵』經典に名が記載されているような神格より、通俗信仰上の神の方が圧倒的に多い。

この『三教源流搜神大全』では、始めに三教各々の始原を儒氏源流・釈氏源流・道教源流という項目を設けて説明している。当然ながら儒氏源流では孔子、釈氏源流では釈尊についてその事跡を述べている。そして道教源流においては、太上老君の出世や封号に関する説明をしている。このことは道教の始祖が老君であつたとの民間認識を示すものであると言えよう。玉皇上帝や東岳大帝は他に独立した項目を設けられている。しかし不思議なことに、『三教源流搜神大全』には元始天尊についての独立した項目が無く、この道教源流に少し名が見える程度である。概して通俗文学における元始天尊の地位は軽く、『封神演義』を除いては重要な役割を与えられることは少ない。このことは明代には元始天尊より玉皇上帝に主神の地位が移っていることを示唆するものであると考えられる。

さてその道教源流の内容は次の通りである。<sup>(6)</sup>

### 道教源流

金闕玄元太上老君聖紀、按洞玄靈宝元始上帝真教元符經、道君告皇帝曰、昔天地未分、陰陽未判、濛洪杳冥、

溟滓大梵、寥廓無光、結空自然中有百千萬重正氣、而化生妙無聖君、歷尊号曰妙無上帝、自然元始天尊、一号天宝丈人、經九億九万九千九百九十億万劫。次結百千萬重真氣、而化生妙有聖君、自称妙有大帝、虛皇玉晨大道君、一号靈宝丈人、經八億八万八千八百八十億劫。次結百千萬重道氣、化生混沌聖君、紀号至真大帝、万變混沌元老君、一号神宝丈人。

老君雖累世化身、而未誕生之也。迨商第十八王陽甲時、分神化氣、寄胎于玄妙玉女、八十一年、暨第二十二王武丁庚辰歲二月十五日卯時、誕于楚之苦果瀨鄉曲仁里。姓李、名耳、字伯陽、諡曰聃。著道德二經旨。

又按老君聖紀經、太上老君居太清境、乃元氣之祖宗、天地之根本、于至寂至虛之內、太初太始之先、惟數御運、布氣融精、開化天地。所歷成壞、二儀不可量計、其化身周遍塵沙世界、亦非算數紀極、開闢之後、觀世代之澆淳、隨時立教、代為帝師、建立法度、或流九天、或伝四海、自三王而下、歷代帝王咸宗奉焉。是知天上天下、道氣之內、皆老君之化也。垂億万之法、無不濟度、蓋百姓日用、而不知也。

老子曰、吾乃生乎無形之先、起于太初之前、行乎太素之元、立于太渺之端、浮游幽虛之中、出入杳冥之門。故葛玄序道德經云、老子体自然而然、生乎太無之先、起乎無因之初、經歷天地始終、不可称載。又云世人謂老子降于殷代、老子之号始于無數劫、甚杳冥冥、渺邈久遠矣。開闢已前、復下為帝師、代代不絕、人莫能知之。按老子伝記、自開闢之前、下至殷湯、代代為王者師、皆化身降世。当殷湯甲午十七年庚申、始示誕生之迹。

自太清當道境、乘太陽日精、化五色玄黃、大如彈丸、時玉女屋寢、流入口中、吞之有孕、懷八十一歲、至武丁九年庚辰、剖玉女左腋而生。生而白首、号曰老子。生于李樹之下、指樹曰、此吾姓也。自殷武丁九年庚辰、下至秦昭王九年西昇崑崙、計九百九十六年矣。

按李石統博物志云、唐高祖武德三年、晋州人吉善行于羊角山、見白衣父老、呼善行曰、為吾語唐天子、吾為老君、即汝祖也。高祖因立廟。高宗追尊玄元皇帝。明皇注道德真經。今學者習之。兩京及諸州各置玄元皇帝廟、京師号玄元宮、諸州号紫極宮。尋改西京為太清宮、東京為太微宮、皆置學生。尊号曰、大聖祖高上大道金闕玄

元天皇大帝。

宋国朝会要曰、宋真宗大中祥符六年八月十一日制、謹奉上尊号曰、太上老君混元上德皇帝。

宋仁宗御贊、大哉至道、無為自然、劫終劫始、先地先天、今光点点、永劫綿綿、東訓尼父、西化金仙、百王取則、累聖攸伝、衆教之祖、玄之又玄。

『三教源流搜神大全』の内容は大きく三部分に別れ、各々その成立年代が異なっているが、この「道教源流」の項は、一番古い層に属するものである。『三教源流搜神大全』は明代に流行した類書の形式に則っており、広く諸書を引用している。その中でもこの古い層は、道典からの引用が多く見られ、元代の記述を中心とするという特色を持つものである。この道教源流にも幾つかの道典、また歴史書等が引用されている。記載されている事跡としては、元始天尊や道君とともに、天地に先立って存在していたこと、代々帝師となったこと、殷の陽甲の時代に出世し、秦昭王の時に昇天したこと、唐の王室の祖として祭祀されたこと等が紹介されている。当時大まか認識されていた太上老君の伝承は、ほぼこのようなものであつたと考えられるが、『三教源流搜神大全』の公的な文書を引用してその權威化を意図しているためか、民間伝承的な要素には乏しいものである。

引用されている中で、道典に類すると思われる資料は『洞玄靈宝元始上帝真教元符経』・『老君聖紀経』・葛玄著と称する『道德経序』等である。いずれも直接の引用では考え難く、別の老君伝記の書からのものであると推察される。だが、『洞玄靈宝元始上帝真教元符経』は『正統道蔵』に關経とされているもので、内容の上からの判定は行い難い。それでもここに記載されているものと類似の表現が『洞玄靈宝自然九天生神章経』<sup>(9)</sup>卷上の冒頭に見え、また『無上秘要』<sup>(9)</sup>卷二四の三宝品に引く『洞玄九天経』にも見える。この三清境や天宝丈人の経緯は広く他の道教経典にも見えたはずであるのに、何故この『洞玄靈宝元始上帝真教元符経』を引いたのであるかは解し難いことである。やはり他の経典に依拠したものであろう。老君の伝承と言えば直ちに、かの『猶竜

『伝』<sup>(10)</sup>や『混元聖紀』<sup>(11)</sup>が想起されるが、先の『洞玄靈宝元始上帝真教元符経』に近い内容のものは『混元聖紀』の巻二に見ることが出来る。しかしその注部分で先の『洞玄靈宝自然九天生神章経』を引いていることから、その影響関係については判定できない。

さらに『老君聖紀経』として引かれている文章がある。これが『混元聖紀』に依拠したものであるかは不明である。類似の表現は、例えば『老君聖紀経』の「太上老君居太清境、乃元氣之祖宗、天地之根本」に近い文が、『混元聖紀』巻二冒頭の「太上老君、乃大道之宗祖、三才之本根」として見えるが、若干表現が異なっている。あるいはこの文は、尹文操の『老子聖紀』<sup>(12)</sup>に依拠したものかとも考えられるが、『三教源流搜神大全』の古い層は早くとも元頃の編集であることから、些か難点がある。しかし、先程の例の文により近い記載は、『雲笈七籤』<sup>(13)</sup>の巻一百二「混元皇帝紀」に「…老子者老君也。…元氣之祖宗、天地之根本」として見えており、これは『混元聖紀』の表現より近く、この『老君聖紀経』と称する記述が古いものであることを示唆するものであるかもしれない。

その後に見える「老子伝記」とは何を指すか不明瞭である。特定の書を言うのではなく、『猶龍伝』や『混元聖紀』などの幾つかの伝記を総称しているであろう。『混元聖紀』には幾つかこの文と類似の文章が見える。『続博物志』や宋『国朝会要』等の内容には、特に新しいものもない。総じてこの『三教源流搜神大全』の「道教源流」は、古い成立層に属するためか、他の項目群と違い、民間信仰の直接的な反映というよりは、むしろその背景となった諸資料を整理している点に価値があると考えられるものである。そういった意味では、この「道教源流」は『三教源流搜神大全』でも、やや異なった特色を有する章であると考えられる。

三、『八仙東遊記』に見える「老君道教源流」

明末に通俗小説が隆盛となるに及んで、民間層の事象が大きく小説に影響を与えることになってゆくが、民間信仰の実態等、通俗小説に貴重な資料が残っている場合も少なくない。その中で、やはり道教の起源を記しており、「道教源流」と称したものが幾つか存在する。無論、張道陵の事跡について書かれたものではなく、老君を道教の始祖としての記述で、『三教源流搜神大全』の記載と軌を一にするものである。その中でも些か性格の異なった二種類の資料について見てみたい。一つは『三宝太監西洋記』、もう一つは『八仙東遊記』である。

『東遊記』は、後に『四遊記』<sup>(14)</sup>として合冊された四種の小説の一つで、正式な題名は、『上洞八仙伝』である。この小説の内容は、大きく二つに別れる。始めは、かの八仙、すなわち李鉄拐・鍾離権・呂洞賓・張果老・藍采和・何仙姑・韓湘子・曹国舅<sup>(15)</sup>の八人の仙人が各々得道して集結する話であり、後は、八仙人が東海龍王と宝物をめぐって争う話である。この小説の作者は呉元泰であるが、かなり無原則にあちこちの資料を寄せ集めてこの小説を撰したと考えられ、物語の展開が一貫していない所が多い。後半に八仙の盟友として孫悟空が登場すること等もその無節操さを感じさせるものである。この小説は全部で五十六回の章を持つ中編とも称すべきものであるが、その第二回に「老君道教源流」と題し、話の本筋にはあまり関係のない老君の事跡が挿入される。この小説においては、道教源流のみが語られ、他の二教については記載がない。<sup>(16)</sup>

却説老君者、太上老君也。自混沌開闢、累世化身而來、∴造商湯・周時、分神化氣、始寄胎於玉女、八十一歲、暨武丁庚辰二月十五日丑時、降誕於楚之苦果頼鄉曲仁里。從母左腋出、生於李樹下、指樹曰、此吾姓也。生時白首、面黃白色、額有參天紋理、∴姓李名耳、字伯陽、号曰老子、又号曰老聃。

周文王為西伯、召為守藏史、武王時、使為柱下史。遨遊西極天竺等諸國。康王時、還歸於周、後復遠遊開化西域。乃以周王三十三年、駕青牛車、出函谷關。守關令尹喜知之、求得其道。尹喜字公文、：七月十二甲子、老君果乘白輿、駕青牛、徐甲為御、欲度關。：喜復稽首曰、：知大聖當來西遊、思慕有日、願少憩神駕。老君曰、間關道路、聞有古先生、善人無為、永有綿綿、是以身就道、經歷闕子、何過留耶。喜又曰、：願不見棄、少垂哀閱。老君曰、子何所見而知。喜曰、去冬十月、天聖星西行過昴、自今月朔、融風三至、東方真氣、伏始龍蛇西及。此大聖人之微、故知必有聖人度關。老君怡然笑曰、善哉、子既知吾、吾亦知子矣。子有神通之見、當得度世也。喜再拜曰、敢問大聖姓名、可得聞乎。老君曰、吾姓字渺渺、從劫至此、非可尽說。今姓李字伯陽。喜於是就官舍、設座供養、行弟子禮。老君乃為喜留關下百余日、尽伝以却外修真之法。

時老君之御者徐甲、少貨、於老君約曰、願言錢至關時、當得七百三十萬錢。甲見老君言、道遠迫、亟求索錢。：老君謂甲曰、汝隨我二百余年、汝久成死、吾以太玄生符與汝、所以得生至今日。汝何不念此、而乃訟吾。言訖、符自甲口中飛出、丹篆如新。甲即成一团白骨。喜乃為甲叩頭、請赦其罪、以求更生。：

一日、老君謂喜曰、吾昔告你古先生者、即吾之身、嘗化乎竺乾、：於是復以道德五千言授之、期以千日之外、可尋吾於蜀青羊之肆也。言訖、縱身空中、坐雲華之上面、放五明、身現金光。：喜遂將老君所說理國修身之法、去奢滅欲之言、叙而徧之、為三十六章、昌口西昇經、喜乃屏絕人事、三年之內、修煉丹汞、所授書悉徵其妙。乃自著書九篇、号関尹子、至二十五年、往西蜀、尋青羊之肆。：

至敬王十七年、孔子問道於老聃。：秦時降陝河之濱、号河上公、授道於安期生。漢文帝号成子。：成帝時、降曲陽泉、授于吉天下真錄。：順帝時降、授天師三洞經錄。：唐高祖時降羊角山。：宋政和二年、降華陽洞天、授梁先生加句天童護命經。：

宛丘先生者、服制命丸得道、：此老君·宛丘之出処、開引道教之源流也。



この「道教源流」では、老君の事跡が過函谷関説話を中心に簡明にまとめられており、前代までの老君説話を多く反映したものとなっている。一見して『猶龍伝』や『混元聖紀』等の資料を要略したものであることが分かるものであるが、記事の内容等から判断して、『猶龍伝』の記載に依拠しているものと思われる。事跡の配列も『猶龍伝』の巻三から巻六までの順序に概ね従ったものである。

この内容を先に見た『三教源流搜神大全』の「道教源流」と比較してみると、降世年代を「殷の武丁二月十五日」とすることや、唐の祖であったことを強調すること等、共通点が多い。しかしまた一方で、事跡の中でも、重点の置き方に相違がある。例えば、この『東遊記』の「道教源流」では、天地に先立つて存在したことなどは全くふれられず、代々帝師となったことも非常に簡単に述べられているのみである。それに比べ、出世説話や過関説話についてはかなり詳細に書かれており、また尹喜に関しても多くの記述が割かれている。さらに老君と尹喜の会話や、御者徐甲の説話にまで多くの文が費やされているのは、全く作者の、また一般の民間伝承における説話の中心点が専ら過関説話に移っているためではないだろうか。無論、出世説話や孔子問礼等、重要な事跡の扱いは軽いものではないが、過関説話ほどではない。また老君が西域へ赴いたことは記されているが、例の化胡説話については全くと言ってよいほど語られない。一般に通俗小説においては、明代であるためか、化胡説話についてはあまり記載がない。僅かに、『西遊記』第六回において、「老君道、：這件兵器、：一名金鋼琢、：當年過函関、化胡為仏」<sup>(17)</sup>との老君の説明が見えるのみである。民間においてはやはりより奇異な説話が有力になるためであるうか、老君の説話においてもその出世説話と過関説話が強調されることになる。次に見る『三宝太監西洋記』もその傾向は同じである。

『東遊記』においてこの話が挿入されるのは、李鉄拐の説話の中途においてである。李鉄拐は老君と宛丘子が華山に在住しているということを聞き、教えを乞いに行く。これは『西遊記』において老君が天上の兜率天において、『封神演義』がやはり天上の玄都にすること等と相違するものである。これは民間伝承というよりは、

物語上の改変であろう。李鉄拐はこの後、魂だけで老君に従い西域等に行き、その間に弟子が誤つて肉体を焼いてしまったため、やむをえず餓死者の体を借り、現在のような杖をひきずる姿になったのであると説明されている。李鉄拐は一応八仙の領袖であるとされるので、老君から直接に教えを受けたという設定が必要のため、このように説話の設定が改変されたのであると考えられる。八仙人の伝承には、全真教の影響を思わせるものが多いが、五祖の伝道が語られる時に、東華帝君、鍾離権、呂洞賓の前に老君を置くことがあるが、『東遊記』においては、李鉄拐が鍾離権得道の手助けをすることから、鉄拐に些か東華帝君の役割を持たせているようである。但し、第十六回「東華伝道鍾離」の章では東華帝君が鍾離権の師であつたと書かれている。しかし後の章では、東華帝君はさらに下凡して呂洞賓となつたとして、伝承が錯綜している。これは様々な民間伝承に整合性を持たせようとしたためであろう。

『東遊記』において老君は第八回から第十回にかけて、鉄拐が誤つて老君の青牛を逃してしまつたため、罪を得て下凡させられる説話に登場するが、その役割はさほど重要なものではない。通俗小説とはいえ、『東遊記』は、その取材した説話自体が古いものから新しいものまで雑多であるためか、些か曖昧な性格のものになつてしまつている。特にその前半においてそうである。その点では、この前半部分においては『西遊記』や、『三宝太監西洋記』に比して、民間伝承の影響がやや低い作品であると言えるのではないか。

#### 四、『三宝太監西洋記』における「道教源流」

『三宝太監西洋記』は明万曆年間に成立したと考えられる通俗小説で、作者は羅懋登である。この羅懋登は、先に見た『三教源流搜神大全』と同系統の文献である『搜神記』の序文を書いた人物であり、明末の民間信仰について深い関わりを有している。この小説は、明の鄭和の西洋行を主筋とした神怪小説であるが、その間に筋とは無関係である様々な民間伝承がその中に挿入される。しかも『封神演義』と異なり、意図的な説話の改変が行われていないため、『西遊記』と並んで明の民間伝承を残す貴重な資料であると考えられる。この小説においては、重要な登場人物として張天師と、燃燈仏の化身である碧峰長老があり、この二者に絡む説話が多く記載されているが、このほかにも、西の果てがそのまま地獄につながっているとする世界観や、明の永楽帝は玄天上帝の下凡であるとの説話、他に見られないような特殊な説話も多い。

さてこの『三宝太監西洋記』にも、「道教源流」と称する一段が存在する。もともと、『東遊記』のようにまるまる一回分を費やすことはない。この文章が挿入されるのは、第一回の「孟蘭盆仏爺掲諦 補陀山菩薩会神」と題する回である。ここでは『三教源流搜神大全』と同じく、三教の各々の源流が語られる。作者羅懋登はおそらく『搜神記』の文章を利用できたはずであるから、『三教源流搜神大全』と類似の文が見えるのは当然である。しかしまた一方で、ここに見える老君説話は、先に見た二つの記載と大きく異なる性格を有している。その文は次のようなものである。文体も同じ通俗小説である『東遊記』と違い、口語的な要素が強い文章である。<sup>(20)</sup>

那一個是道家。這如今普天下觀裏供奉的太上老君的便是。

這太上老君却怎麼樣出身。原來老君住在太清道境、乃元氣之祖宗、天地之根本。他化身周歷塵沙、也不可計

數。自從盤古擊開混沌以來、伝至殷湯王四十八年上、這老君又來出世、乘太陽日精、化做五色玄黃、如彈丸般樣的大。時有玉女當昼而寢、他便輕輕的流入玉女的口中、玉女不覺、一口吞之、遂竟有孕。懷了八十一年、直到武丁九年歲次庚辰。剖破玉女右脇而生。生下地時、頭髮已自欺霜鬢雪、就是個白頭公公、因此上人人叫他做老子。老子生在李樹下、指李樹為姓、故此姓李、名耳、字伯陽。到秦昭王九年、活了九百九十六歲、娶了一百三十六個婆娘、養了三百六十一個兒子。

忽一日吃飽了飯、整整衣、牽過一只不白不黑、不紅不黃、青萎萎的兩角牛來、跨上牛背、竟出函谷關而去。那一個把關的官也有些妙處、一手擋住關、一手挽着牛、只是不放。老子道、恁盤詰奸細麼。那官道、不是。老子道、俺越度關津麼。那官道、也不是。老子道、左不是、右不是、敢是要些過關錢兒。那官道、說個要字兒到在卯、只是錢字又不在行。老子道、要些甚麼。那官道、要你那袖兒裏的。老子道、袖裏止有一本書。那官道、正是這書。老子不肯、那官要留。捱了一会、老子終是出關的心勝、只得曳起來、遞書与了那官、老子出關去了。這書就是道德經。上下二篇、上篇三十七章、下篇八十章。道教大行于東土、和儒釈共為三教、這是道家。

この記述が始めに見た『三教源流搜神大全』の文章を元に書かれたものであることは、『三教源流搜神大全』の「太上老君居太清境、乃元氣之祖宗、天地之根本」と類似の表現である「原来老君住在太清道境、乃元氣之祖宗、天地之根本」の文が存在することによつて了解できるが、しかし、後半部の説話は、民間的な伝承を強く感じさせるものであり、『三教源流搜神大全』と異質な性質を有するものである。

この『三宝太監西洋記』の「道教源流」においても、『東遊記』と同じく重点が置かれているのは、老君の出世説話と過関説話である。おそらく当時の民間伝承で好んで語られた説話がこの二者なのであろう。老君の出世説話については、この『三宝太監西洋記』においても大きく異なることはない。殷の武丁の時に玉女の脇から誕生したこと、李樹を指して姓としたこと等、『三教源流搜神大全』とも『東遊記』とも共通するものである。ま

た、秦の昭王の頃まで九百九十六歳であったことも同じであるが、その後の「百三十六人の妻を娶り、三百六十一人の子を設けた」という記載は他の二書には見えない。これは彭祖の説話を誤解してか、あるいは意図的に老君に附会したものと考えられる。

過関説話については、この『三宝太監西洋記』の話は、先に見た『東遊記』と異なっている。函谷関を過ぎようとする老君が引き止められて、道德経を残すという大筋は変わらないものの、ここには尹喜は全く登場せず、代わって出てくる官吏は、甚だ老君に非好意的であり、袖の下をせがむ俗悪官吏である。これが尹喜のなれのはたであるとするれば、民間説話での尹喜の評価が低かったのではないかと考えられるが、『東遊記』のように、正当な記述が一方で存在することから見れば、この官吏は尹喜ではないようだ。しかしこの俗悪官吏のお陰で道德経が残り、道教が大いに中国で行われることになったとするのである。また、官吏と老君の会話には、滑稽なものを感じられる。この過関説話には、民間伝承的な要素が強く影響しているのである。

勿論、この説話が作者羅懋登の小説上の虚構であるとも考えられる。しかし、総じて『三宝太監西洋記』は、創作的な部分以外では、民間信仰の説話を勝手に改変することなく、そのまま描写する場合が多く、ここでの記述も、民間伝承にこのような説話が存在したと見なしてよいであろう。

以上、明代における「老君道教源流」と称する三種の資料を大まかに検討したが、三種とも民間信仰を基盤とするという共通点があるというものの、その説話の表現や重点とする所は大きく異なっている。それは三者の取材した材料自体が大きく相違していることも影響しているのである。『三教源流搜神大全』においては、道教経典や歴史書に基づく記述が多く、『東遊記』では、同じく道教経典に基づいた記載が中心であるが、そこで重点の置かれている文章は、より説話的な要素の強いものであった。『三宝太監西洋記』は、おそらくは『三教源流搜神大全』の文を基礎とするものの、より民間伝承の物語に影響を受けたものとなっている。『三教源流搜

神大全』はともかく、同じ通俗文学でも『東遊記』と『三宝太監西洋記』では、民間信仰の反映の度合いに差異が感じられるものである。一方で、古来からの老君伝承という点では、説話の根本まで改変することはあまりない。また道教の成立が老君の出世以降であるという認識は、三者すべてに等しく見られるものである。すなわち、道教の起源を老君に求め、少なくともその過関以降に「道教」が存在したと見なすことは、民間一般においても広く認知されていたであろう。それでもやはり民間伝承の中で、ある程度説話の取捨選択が行われたのは確かである。この道教始原説話においても、より通俗的な話が好まれ、出世説話と過関説話のみが強調されてゆくことになった。『三宝太監西洋記』に見える説話は、もともと率直に民間の認識を反映したものであり、民間伝承の明末における最終的な姿であると考えられる。

#### 注

- (1) 『西遊記』百回本第九十八回、天竺において如来より三蔵が受け取った経典は、皆漢字で書かれたものであった。明代においては「訳経」という事業に全く関心がはらわれなかったためであろうか。さらに第八十八回では、「周りの人々の話す言葉も容貌も、中華と異なることがなかった」とある。
- (2) 『西遊記』第四十五回の孫悟空が車運国において道士と術比べをするくだりなど。
- (3) 『封神演義』の物語の設定は殷末周初であるが、多くの道士が登場する。太公望姜子牙自体が、元始天尊の弟子であるということになっている。
- (4) 『三国演義』毛本第一百一回、「孔明善会八門遁甲、能驱六丁六甲之神」などであり、孔明のイメージは道士に近い。もともと『封神演義』の呂尚をはじめとして、通俗文学においては、軍師に道士の印象が重なることが多いようだ。『水滸伝』に登場する道士公孫勝は、梁山泊の副軍師の役割を与えられている

し、正軍師兵用も道士ではないのに、道服を使用することが当然のように語られている。このような道士と軍師の結びつきについては、別の機会に述べてみたい。

(5) 『三教源流搜神大全』のテキストとしては、上海古籍出版社発行（一九九〇）の『絵図三教源流搜神大全』を使用した。この『三教源流搜神大全』は清末に葉德輝が復刻したものであるが、脱落部分がある。欠けた箇所については内閣文庫所蔵の明版本で補った。なお上海古籍出版社は、『三教源流搜神大全』の他に、同類の書である『搜神広記』と『搜神記』を付しており、非常に便利である。

(6) 前掲『絵図三教源流搜神大全』一四頁〜十六頁。

(7) 太上老君の伝説とその周辺については、楠山春樹博士『老子伝説の研究』（創文社）から大きな教示を受けた。

(8) 『道蔵』洞玄部一六五冊。また洞玄部一八六冊から一八八冊に『洞玄靈宝自然九天生神章経解義』・『洞玄靈宝自然九天生神章経解』・『洞玄靈宝自然九天生神章経注』がある。ここでは、華陽子注とする『洞玄靈宝自然九天生神章経注』を参照した。

(9) 『道蔵』太平部七六八冊〜七七九冊。

(10) 『道蔵』洞神部五五五冊。

(11) 『道蔵』洞神部五五一〜五五三冊。

(12) 尹文操の『老君聖紀』については、前掲楠山博士著『老子伝説の研究』「序章 展望と論点」二二七頁以下を参照。『三教源流搜神大全』の最も古い層は、元代の成立であるので、或いはこの記述が直接に『老君聖紀』を引用している可能性もある。

(13) 『道蔵』太玄部六七七冊〜七〇二冊。

(14) 『四遊記』の四種とは、この呉元泰の『八仙東遊記』及び、玄天上帝を主人公とした『北遊記』、華

光・馬元帥の事跡を中心とした『南遊記』、そして節略本の『西遊記』である。『北遊記』と『南遊記』の作者は明万暦年間に活躍した余象斗である。

(15) 八仙の顔ぶれが確定したのは、実にこの小説が出て以降のことである。八仙人の人員はこの他に、李元中、風僧寿、玄壺子、劉海蟾等がある。これについては、河北人民出版社発行の『中国民間諸神』(一九八六)の七七九頁以下に論がある。

(16) 以下の引用については、テキストとして善本とは言いがたいが、世界書局発行の『平妖伝 四遊記』を使用した。現在流布しているものはこれを元にしたものが多い。

(17) 『西遊記』は人民文学出版社(一九八五)の百回本を使用した。

(18) 例えば、『金蓮正宗仙源像伝』等がそうである。

(19) 『搜神記』は『続道蔵』に収録されている。しかし、『続道蔵』の方の序文は羅のものと同じ文章であるにもかかわらず、羅の署名がない。

(20) ここでは上海古籍出版社発行(一九八五)の『三宝太監西洋記通俗演義』をテキストとして使用した。